

神代文字の護符(大山阿夫利神社護符)

飯能市立博物館 学芸職員 村上 達哉

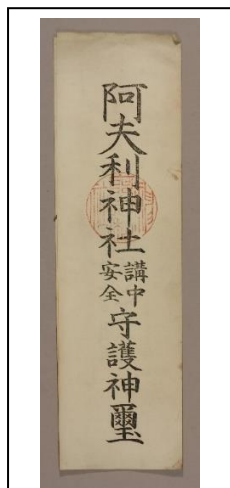


図1 阿夫利神社
講中安全守護神璽



図2 護符の中の内符

護符(御札・御守とも呼ばれる)は神社・寺院で出され、貼る、所持するなどにより神仏の守護を受け、人間を災厄から守ると信じられています。信仰に関わる資料として位置づけられ、当館でも約 3,700 点の護符を収蔵しています。その中には神代文字が刷られた護符も含まれており、今回紹介する大山阿夫利神社の護符(図1)もその一つです。

神代文字は神代(神武天皇即位以前)に作られた文字とされ、早い時期だと鎌倉時代後期には、そのような文字が存在する可能性が言及されています。その後、神代文字と思われるものの類例が蓄積されていき、江戸時代の終わり頃、国学者の平田篤胤(1776-1843)と、同じく国学者である伴信友(1773-1846)との間の論争に至りました。平田篤胤は、存在がもつとも確実な神代文字として、対馬国(現長崎県対馬市)の阿比留氏が「内々にて」伝えてきた文字を挙げ「日文」を主

張しましたが、伴信友は神代文字そのものの存在を否定しています。

大山阿夫利神社護符の神代文字は、護符の中身にあたる内符に刷られています(図2・3)。内符の上半部に「大山祇大神/高麗神/大雷神」と三柱の御祭神名が刷られ、その下に2行にわたって神代文字が刷られています。千々和到氏(國學院大學名誉教授)はその神代文字を、平田篤胤が『神字日文伝』などの著作の中で分類したうちの「第十三文」と呼ばれる字体に「近いように見受けられる」とし、「ひふみよいむな/やこともちろ」と読めるとしています。ちなみにこの読みに類似するものとしては、奈良県天理市の石上神宮で朝拝にて奏上される「ひふみ祓詞」が挙げられます。双方とも、「ひとつ、ふたつ、みつつ、よつつ、いつつ、むつつ・・・」と数える言葉の頭を繋げて読む点で一致しています。

大山信仰の主体は江戸時代までは大山寺で、出されていた護符は主に「大山寺宝印」と刷った牛玉宝印であったようです。しかし明治維新後は、神仏分離の影響により大山信仰の主体は大山阿夫利神社となります。千々和氏はその大山の改革を推し進めたのが、平田篤胤の門下生であった権田直助〔幕末・明治時代前期の国学者・神道家・医者。毛呂本郷(現入間郡毛呂山町)出身〕であることに着目し、大山阿夫利神社において神代文字を刷る護符が成立する背景に、権田の存在があったことを指摘しています。

神代文字は、現在では江戸時代より前の時代に遡っての存在を疑問視されていますが、幕末から明治にかけての、日本人の心性を理解するためには欠かせない研究対象と言えます。

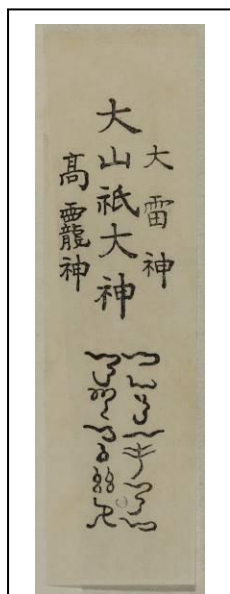


図3 内符(御祭神名と神代文字)

【引用・参考文献など】

千々和到「飯能市郷土館収蔵の「おふだ」に書かれた神代文字」『飯能市郷土館研究紀要』飯能市郷土館平成 29(2017)年

国史大辞典編集委員会 編『国史大辞典』第7巻 株式会社吉川弘文館 昭和 61(1986)年

大山阿夫利神社ホームページ <https://www.afuri.or.jp>

石上神宮ホームページ <https://www.isonokami.jp>